

資料

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究13
P.1-11 (2025)

大学院助産師教育における特色ある教育内容 —最近の研究および解説記事から—

Distinctive educational content in graduate midwifery education : Insights from recent research and explanatory articles

西岡 笑子¹⁾
NISHIOKA Emiko

小山田 路子¹⁾
OYAMADA Michiko

田中 梨穂²⁾
TANAKA Rihō

湯本 萌賀¹⁾
YUMOTO Moeka

要旨

目的: 大学院助産師教育における特色ある教育内容について明らかにする。

方法: 2010年から2024年における国内の文献を対象に医学中央雑誌 web を用いてデータベース検索を行った。キーワードは「大学院」、「助産師教育」、「助産教育」とした。大学院における助産師教育についての調査、解説および特集記事を採用とした。

結果: 9件の論文、9件の解説記事を検討対象とした。論文の内容は、①継続事例実習、②OSCE、③大学院助産師教育に関するニーズ調査、④その他に分類することができた。解説記事の内容は、①ウィメンズヘルス実習・演習、②妊娠期から産褥期における継続事例実習、③分娩期シミュレーション教育、④その他に分類することができた。

結論: 助産師教育における大学院教育では、継続事例実習、ウィメンズヘルス実習、分娩時シミュレーション教育、OSCEの実施、指定規則の規定を上回る分娩介助実習を行っていた。各大学院では教育機関の理念のもとに、助産専門職業人の育成を行っていた。上級助産実践、ウィメンズヘルスなどを視野に入れながらどのような専門職業人を育成するかについて、理念を反映させ、時代に対応できる人材の育成に取り組んでいることが明らかとなった。

索引用語: 大学院、助産師教育、助産教育、継続事例実習、ウィメンズヘルス

Key words: graduate school, midwifery education, midwife education, continuous case study training, women's health

1. 背景

日本における周産期医療は、近年、大きな転換期を

迎えている。出生数が減少する中、産科医師や産科施設が不足し、妊婦の高齢化によるハイリスク妊産婦が増加している。また、家族構造の変化により、妊産婦のメンタルヘルスや児童虐待といった複雑な社会問題も顕在化している。そのため、安全・安心で切れ目ない妊娠・出産・育児環境の整備は喫緊の課題となっている¹⁾。

助産師とは、保健師助産師看護師法では、「助産師

1) 順天堂大学 保健看護学部 看護学科 母性看護学領域

2) 株式会社 セリオ トレジャーキッズおおたかのもり保育園

1) *Department of Maternal Nursing, Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Serio Treasure Kids Otakanomori Nursery School CO., LTD.*

とは厚生労働大臣の免許を受けて、助産または妊婦、褥婦もしくは新生児の保健指導を業とする女子をいう²⁾と定義されている。周産期における助産師の役割は、自律して正常分娩の介助を行うことである。今日の周産期医療の変化に対応し、責任を持ってその役割を果たすためには、優れた助産診断能力と実践力が不可欠であり、助産師教育においてもこれらの能力を育成することが求められている。また、出産後の育児不安や虐待予防のために、育児指導や精神的サポートを通じて地域での母子保健活動を行う力も助産師に期待されている。

日本助産師会は2021年に「助産師のコア・コンピテンシー」を示した。これは、「日本の助産師に求められる必須の実践能力」のことである。助産師のコア・コンピテンシーは、「倫理的感応力」、「マタニティケア能力」、「ウィメンズヘルスケア能力」、「専門的自律能力」という4つの要素³⁾から構成される。助産師教育にはこの4要素の最低基準能力の修得を目指す必要がある。

このように、わが国の周産期体制、疾病構造の変化、社会的見地等から助産師へ求められる役割は年々変化し、女性のライフサイクル全体を視野に入れた高い実践力が求められている。

国際助産師連盟（International Confederation of Midwives：ICM）は、「助産師教育の世界基準（2010）」において、助産師の基礎教育課程の最短期間を18か月間⁴⁾としている。わが国の助産師養成機関は、大学院、大学専攻科・別科、大学、短期大学専攻科、養成所と多岐にわたっており、就業期間も1年から2年と幅がある。教育機関別の助産師国家試験合格状況は、2010年は大学院3.8%、大学専攻科・別科8.4%、大学35.7%、短期大学専攻科8.1%、養成所44.0%⁵⁾であった。2024年2月に実施された助産師国家試験は約2,100人が受験し、大学院12.3%、大学専攻科・別科25.2%、大学25.7%、短期大学専攻科3.0%、養

成所33.7%⁶⁾と、大学院の割合が増加している。

わが国の大学院での助産師教育は、2004年に天使大学大学院が専門職大学院学位課程を設置したのを皮切りに、2005年には修士課程に聖路加看護大学大学院、2006年に国際医療福祉大学大学院、2007年に日本赤十字看護大学大学院、2008年に東京女子医科大学大学院と、私立大学がさきがけて設置した。公立大学では、2008年に名古屋市立大学大学院が初めて大学院での助産師教育を開始した。2023年5月時点において、助産師教育を大学院教育に設置した大学は、52校の大学院修士課程（国立18校、公立14校、私立20校）と1校の専門職大学院⁷⁾である。

本稿の目的は、調査結果および解説記事を整理・分析することにより、大学院助産師教育における実践内容、特色ある教育内容について明らかにすることである。

II. 用語の定義

大学院における助産師教育とは、大学院修士課程（博士前期課程）における助産師免許取得のための教育機関のことである。

III. 調査方法

1. 文献検索と採択基準

2010年から2024年における国内の文献を対象に医学中央雑誌webを用いてデータベース検索を行った（検索日2024年10月10日）。キーワードは「大学院」、「助産師教育」、「助産教育」とした。論文、総説・解説・特集は含み、会議録、重複した文献を除外した。大学院における助産師教育についての調査、解説および特集記事を採用とした。なお、論文については種別（原著論文、研究報告）を限定しなかった。

2. 文献採択のプロセス

データベース検索により抽出された91件の文献に

ついて前述の採択基準をもとにスクリーニングを行い、表題・抄録より採択基準を満たさない論文を除外した。その後、重複する文献を除き、本文を精読し、最終的に9件の論文、9件の解説記事を検討対象とした。

IV. 結果および考察

1. 研究、解説の動向

1) 年次推移

大学院における助産師教育の現状と課題に関する研究、特集の動向として、検討対象になった18件のうち、(1)論文が9件、(2)解説記事が9件であった。(1)論文の発行年数は、2022年および2015年が各2件と最も多く、2023年、2020年～2018年、2012年が各1件であった。(2)解説記事の発行年数は、2022年が4件と最も多く、次いで2023年が3件、2017年、2011年が各1件であった。

2) 研究論文、特集記事の内容

(1) 論文9件

論文の著者は、公立大学大学院教員によるものが6件と最も多く、私立大学大学院教員によるものが2件、国立大学大学院教員によるものが1件であった。大学院生を対象としたものが3件、大学院修了後の助産師を対象としたものが2件、助産大学院生および学部助産学生を対象としたものが1件、大学院助産教員を対象としたものが1件であった。ニーズ調査は、学生および看護職を対象としたものが1件、学部学生を対象としたものが1件であった。

研究内容は、①継続事例実習、②Objective Structured Clinical Examination(客観的臨床能力試験:以下OSCE)、③大学院助産師教育に関するニーズ調査、④その他に分類することができた。

①継続事例実習

継続事例実習についてのインタビュー調査を実施していたのは、国際医療福祉大学大学院⁸⁾と愛知県立大学大学院⁹⁾であった。国際医療福祉大学大学院

は、妊娠中期から分娩期、産褥期、育児期(最長1年)の継続事例実習を実施していた⁸⁾。沼澤らは、大学院助産師学生8名を対象に、実習担当教員によるフォーカスグループインタビューおよび個別インタビューを実施した。その結果、対象との関係構築、アイデンティティ形成の強化、および今後の助産ケアの示唆という3つの様相が見出された。大学院教育は、2年間の学びが助産師としてのアイデンティティ形成に有効であったと考えられる。しかし、出産後は乳児健診の同行のみで育児支援の機会が少なく、育児支援の機会を増やすことがカリキュラム上の課題であることが示された⁸⁾。

愛知県立大学大学院では、継続事例実習として分娩期から産後6か月までの継続支援を行っていた⁹⁾。これまでの助産師教育では、教育期間の制限もあり妊娠・出産時ケアの教育に重点がおかれ、産後1か月健診までの支援で終了する教育期間が多く、それ以降の育児期の教育に十分な時間が確保できない傾向にあった¹⁰⁾。大学院の助産師教育では、2年間の教育期間があるため、産後6か月～1年といった長期間の継続事例実習に取り組むことができるのではないかと見える。助産学実習において妊娠中期から産後1か月までに継続して受け持つ継続事例実習に関して、保健師助産師看護師法の学校養成所指定規則(以下指定規則)において「実習期間中に妊娠中期から産後1か月までに継続して受け持つ実習を1例以上行う」¹¹⁾と明記されている。また、厚生労働省は、2010年に公表した「看護教育の内容と方法に関する検討会第一次報告」では、「今後より強化されるべき助産師の役割と機能」の一つに、「妊娠期から育児期までの継続したケア」¹²⁾を挙げている。妊娠期からの継続的な関わりの中で、学生は対象者に寄り添い人間関係を構築し、個別性やニーズに見合った保健指導を行う¹³⁾など、保健指導能力や助産診断能力のための学修効果が高いことが窺える⁸⁾。

神谷らは、大学院助産師教育における育児期の継続家庭訪問支援教育プログラムの質的評価を行うために、学生 11 名を対象に、修了確定後に、継続家庭訪問の個別指導を担当しなかった教員による半構造化面接を実施した。その結果、教育プログラムは、育児期の経過やケアの重要性を学ぶだけでなく助産師としてのやりがいを感じる機会となっていた。退院後も継続して母子を受け持つことで、【入院中や施設入院中のケアの重要性】【育児期を考慮した施設入院中の支援への活用】といったカテゴリーが生成されたことから、施設入院中のケアを振り返り、今後施設入院中のケアにも活用可能であると述べていた。その一方で、【過去に母子と関わる機会の少なさによるイメージ化や関わり方の難しさ】【様々な要素が絡み合う育児期の母子への支援の難しさ】、学生の学びは家族の変化や特徴の把握にとどまり、家族を含めた支援には至っていなかったことから、家族への支援に繋がる支援策や学生の要望について検討する必要があると示唆された⁹⁾。

2年間の大学院助産師教育においては、教育年限が長いことは量的なメリットが期待できるばかりでなく、質的な充実にも貢献していると考えられる。継続事例実習は大学院助産師教育の一部ではあるが、育児期に継続して関わる助産師の仕事に対するやりがい⁹⁾や助産師としてのアイデンティティ形成に影響を与え、妊娠期から育児期までの助産ケアを通して、専門職としての在り方を追究する機会となっていた⁸⁾。

② OSCE

OSCE の調査結果を発表していたのは奈良県立医科大学大学院であった。岡山らは、2015 年¹⁴⁾と 2022 年¹⁵⁾に調査結果を発表した。2015 年は、修士課程における助産師教育での課程修了前 OSCE を受験する学生の行動への影響要因を分析するために、3 名を対象に教員による半構造化面接を行った。効

果的な修了前 OSCE のためには、1) 実施要項および学生への告知方法の改善、2) 適切な模擬産婦の選定、3) 実際の分娩との乖離を最小限にする状況設定が必要であることが明らかとなった。OSCE は、分娩介助実技テストとは異なる視点での評価を目的としている試験であることを強調し、OSCE に関する知識を事前に定着させ、OSCE に臨む環境を整えることが必要である。また、終了前 OSCE を実施するにあたり、教育期間ごとに都の特徴をふまえて、期待する OSCE の効果や目的を明確にする必要がある¹⁴⁾。

2022 年は、修了生が病院就職後に感じた修了前 OSCE の影響と助産師 1 年目の課題を明らかにすることを目的に、修了後 3 年以内の臨床助産師 10 名を対象に教員による半構造化面接を実施した。修了生が病院就職後に抱えた課題として、乳房の観察と授乳支援、ハイリスク妊産婦の観察とケアが抽出された¹⁵⁾。全国助産師教育協議会は「大学院における助産師教育のモデル・コアカリキュラム 2018」の中で、修了者に求められる資質・能力として、ローリスクおよびハイリスク妊産婦・新生児とその家族の診断とケアが必須である¹⁶⁾と明記している。授乳支援は就職後すぐに求められる実践能力のため、実践力を補完する内容をカリキュラムに組み込むことが、教育の質を向上させるために重要である。各大学院で行われているカリキュラムや実習内容によって、修士課程修了前に補強すべき内容を検討し修了前 OSCE を実施することは、大学院の助産師教育の質担保に寄与しうることが示唆された¹⁴⁾。

③ 大学院助産師教育に関するニーズ調査

大学院助産師教育に関するニーズ調査を実施していたのは、福岡県立大学大学院¹⁷⁾と北海道大学大学院¹⁸⁾であった。

安河内らの調査では、福岡県立大学看護学部学生 212 名、九州・沖縄・山口県内の看護系大学の

学生 490 名、福岡県内の看護専修学校の学生 71 名、福岡県内の勤務看護師 42 名、助産師 102 名、合計 917 名を対象に実施した。大学院での助産実践形成コースの設置について賛成する者は 81.9%であった。興味がある者が 63.8%を占めていた。大学院教育に望む内容については「充実した実習体制」75.5%、「授業科目（カリキュラムの充実）」68.0%¹⁷⁾の順に多かった。

柴田らの調査では、A 大学看護学専攻の女子学生 130 人（3 年生 64 人、4 年生 66 人）を対象に実施した。助産希望者は 5 名であった。大学院での助産師教育のメリットは「視野が広がる・将来的にリーダーとなって統率力を身につけられる・将来への選択肢が広がる・修士学位を取得できる」、大学院に求める教育内容は「助産学だけでなく、医学的知識（産婦人科、小児科など）の強化・助産院での実習」などであった。大学院の助産課程で力を入れて欲しいのは「正常分娩や異常分娩の診断とケア・ハイリスク母子のケア」¹⁸⁾などであった。

両大学院の調査は、大学院設立前に実施されたものである。これらのニーズ調査の結果から、それぞれの大学の特色を活かし魅力あるカリキュラムを作成していくことが求められる。

④その他

三瓶らは、修士課程で助産師教育をしている 4 大学の教員 4 名に修士課程における助産師教育の実態についてインタビュー調査を実施¹⁹⁾した。修士課程における助産師教育の単位数は 4 大学とも 58 単位以上であり、助産学実習の単位数は 11～14 単位であった。学生 1 人あたりの分娩取扱い数は 10～15 回であり、ハイリスクケアに関する実習も行われていた。指定規則では助産学実習は 11 単位であり、実習中の分娩取扱いは 10 回行うことが規定されている。助産学実習における分娩取扱い回数に係る調査によると、実習単位数の平均は大学専攻科が

最も多く、12.2 単位、次いで大学院 11.6 単位であった。平均分娩取扱い回数は大学院が最も多く 11.8 回、次いで大学別科、10.1 回、大学専攻科、10.0 回、大学、9.9 回であった。インタビューを行った大学院では分娩の取り扱いはいずれも 10 回以上であり、13～15 回経験できている大学もあった。

また分娩介助のほか、NICU、MFICU 実習、遺伝カウンセリングに関する実習、解剖実習などの実習が行われていたことから、正常経過を逸脱した症例に対応する能力を育成するための実習が取り込まれていた。周産期医療ではハイリスク妊娠・分娩が増加している現状に対応するための方策であると考えられる。

修士論文を課している大学が 2 大学、課題研究が 2 大学であった。大学院教育で助産師教育を行う場合、助産師に必要な教育内容と研究力の修得を含めた大学院で修得すべき教育内容は量的に膨大である。助産師に必要な教育内容と大学院で修得すべき教育の両立を図るために、研究科目の到達レベルをどこに設定するのかについて、議論の余地が残されていると考えられる。

猿田²⁰⁾では、修士課程で助産師教育を受けた助産師の職業的アイデンティティに何が影響をし、形成されているのかを明らかにすることを目的に臨床経験 1 年以上の助産師 7 名を対象に半構造化面接法を実施した。修士課程を修了した助産師の職業的アイデンティティは【モチベーション】【専門職の在り様の追求】【助産師のジレンマ】【マネジメント】【大学院教育の重要性】の影響を受け、助産ケアの実践の質、チームの質、看護研究の取り組みに影響を与えていた。

山田ら²¹⁾では、助産師養成課程で学んだ大学院生と大学生の妊婦健康診査実習前後の助産実践能力の到達レベルの違いを自己評価とその理由から明らかにすることを目的に調査を実施した。助産師養成課

程の大学院生 10 名と大学 4 年生 9 名を対象に、妊婦健康診査での助産実践能力に対する自己評価と自己評価の理由について、実習前後に調査した。学部生の自己評価得点とその理由からは、助産師教育卒業時の「少しの助言で自立してできる」の到達レベルまで至っていなかったが、大学院生からは、助産診察技術の基本となる「胎向」は実習後に有意に高くなっており、自己評価の理由からも「少しの助言で自立してできる」の到達レベルにあったと示唆された。しかし、アセスメント能力、コミュニケーション能力と助産師としての専門性を得るためには、さらなる実習が必要である。

(2) 解説 9 件

ペリネイタルケア（メディカ出版）「助産教育の新たな挑戦」で、全国各地の個性豊かな教育現場を紹介する全 13 回の連載において、第 1 回、第 4 回、第 5 回、第 8 回、第 10 回、第 12 回の計 6 回大学院修士課程における助産師教育の解説がなされていた。その他、福岡県立大学紀要、東京母性衛生学会誌、母性衛生において発表されていた。

解説記事の著者は、国立大学大学院教員、公立大学大学院教員によるものが各 3 件、私立大学大学院教員によるものが 3 件であった。9 件すべてが演習、実習についての解説記事であった。①ウィメンズヘルス実習・演習、②妊娠期から産褥期における継続事例実習、③分娩期シミュレーション教育、④その他に分類することができた。

①ウィメンズヘルス実習・演習

ウィメンズヘルス実習・演習について紹介していたのは、神戸市看護大学大学院²²⁾と長崎大学大学院²³⁾であった。神戸市看護大学大学院では、ウィメンズヘルス実習として、「女性外来」の見学およびその後の健康教育の実施と「施設選択実習」として、学生は自身の関心のある女性の健康課題に関する施設への実習計画を立案し、実習施設への依頼、調整、

実習等を主体的に行っていた。長崎大学大学院では、ウィメンズヘルス演習として、月経異常や低用量ピル、更年期障害、性感染症、子宮がん検診など婦人科全般の診療を行っているクリニックでの実習と、学生が Reproductive Health and Rights の健康課題からテーマを選び、ターゲットポピュレーション（母集団）を決め、健康教育を企画・実施していた。

②妊娠期から産褥期における継続事例実習

妊娠期から産褥期における継続事例実習について紹介していたのは、香川大学大学院²⁴⁾と東邦大学大学院²⁵⁾であった。香川大学大学院では、より地域に根ざした助産師の活動と、周産期医療を担う施設間の連携を学ぶために継続事例実習を福祉施設内の助産院で実施していた。

東邦大学大学院では、妊娠 6 週～40 週までの妊婦を対象に、妊婦健康診査を 100～110 例を経験していた。その後分娩介助実習を経て、学生は知識と臨床実践能力を統合しながら、助産ケアの本質である“継続的なケア”を学んでいた。

③分娩期シミュレーション教育

分娩期シミュレーション教育について紹介していたのは、同志社女子大学大学院²⁶⁾と長崎大学大学院²⁷⁾、東邦大学大学院²⁵⁾である。同志社女子大学大学院では、妊娠・分娩・産褥・新生児期の OSCE を取り入れていた。OSCE は、シミュレーション教育として、臨地実習前での技術を含む実践力の評価として位置付けていた。長崎大学大学院では、ハイリスク事例の臨床推論を通して、自分たちで緊急時の対応を組み立て、実際にシミュレーションを試みていた。東邦大学大学院では、分娩介助・内診の演習に加え、会陰切開修復トレーナーや鶏肉を使用した会陰裂傷縫合術の演習も実施していた。

④その他

福岡県立大学大学院では、産育習俗探索（フィールドワーク）²⁸⁾について紹介していた。妊娠・出産・

表1 文献リスト(論文)

文献NO	著者	タイトル	雑誌名	論文種別	研究デザイン	対象者	大学名
1	沼澤 広子, 森越 美香, 鈴木 由美	大学院助産師教育における継続事例実習の学びの継相2段階のインタビューによるデータ分析	医学と生物学, 163(1)1-13, 2023.	原著論文	研究Ⅰ: フォーカスグループインタビュー 研究Ⅱ: 個別インタビュー 質的帰納的分析	大学院助産師学生8名	国際医療福祉大学大学院
2	神谷 穂子, 勝村 友紀	大学院の助産師教育における育児期の継続家庭訪問支援教育プログラムの質的評価 教育プログラムを受けた学生の視点から	愛知県立大学看護学部紀要, 28, 85-95, 2022.	研究報告	半構造化面接 質的帰納的分析	大学院助産師学生11名	愛知県立大学大学院
3	岡山 真理, 森兼 真理, 山名 香奈美 他	助産師教育における修士課程修了前に受験した受検的臨床能力試験(OSCE)の影響と助産師1年目に直面する課題	奈良県立医科大学看護研究ジャーナル, 18, 62-60, 2022.	研究報告	半構造化面接 質的帰納的分析	A大学院の修了生で、所属施設および本人から同意の得られた修了後3年以上の臨床助産師10名	奈良県立医科大学大学院
4	猿田 了子	助産師の職業的アイデンティティの形成に関する研究 修士課程で助産師教育を受けた助産師における検討	日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要, 24, 21-29, 2020.	研究報告	半構造化面接 質的帰納的分析	大学院修士課程で助産師教育を受けた修了後3年以上の助産師7名	日本赤十字秋田大学大学院
5	三瓶 まり, 長島 玲子, 藤田 小矢香 他	大学院修士課程における助産師教育の現状	島根県立大学出雲キャンパス紀要, 15, 99-105, 2019.	原著論文	インタビュー	修士課程で助産師教育をしている4大学院の教員4名	島根県立大学大学院
6	山田 貴代, 松岡 恵, 西川 浩昭	大学院教育と学部教育の妊婦健康診査実習前後の助産実践能力に対する自己評価の比較	Journal of Wellness and Health Care, 41(2), 139-150, 2018.	原著論文	量的比較記述的研究および 質的記述的研究	助産師養成課程の大学院生10名と大学院4年生9名を	静岡県立大学大学院
7	岡山 真理, 森兼 真理, 山名 香奈美 他	修士課程における助産師教育での修了前受検的臨床能力試験(OSCE)を受検する学生の行動に影響を与える要因と効果的な修了前OSCEの検討	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 11, 67-76, 2015.	研究報告	半構造化面接 質的帰納的分析	修了前OSCEを受検した本学の助産学実践コース2年次生3名	奈良県立大学大学院
8	安河内 静子, 古田 祐子, 佐藤 香代	大学院における助産師教育に対するニーズ調査	福岡県立大学看護学研究紀要, 12, 53-62, 2015.	原著論文	自記式質問紙調査	福岡県立大学看護学部学生212名、九州・沖縄・山口県内の看護系大学の学生490名、福岡県内の看護専修学校の学生71名、福岡県内の勤務看護師42名、助産師102名、合計917名。	福岡県立大学大学院
9	柴田 美佳, 小林 眞生, 田村 彩乃 他	大学院修士課程での助産師教育に対する看護学生の意見	北海道産科婦人科学会誌, 56(1), 11-20, 2012.	原著論文	自記式質問紙調査	A大学看護学専攻女子学生130人(3年生64人、4年生66人)	北海道大学大学院

表2 文献リスト(解説)

文献NO	著者	タイトル	雑誌名	論文種別	大学名
1	江藤 宏美, 高田 昌代, 井上 理絵 他,	明日の助産師を育てるために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦(第12回) ウィメンズヘルス実習 学生による主体的な実習 施設選択実習 神戸市看護大学博士前期課程助産学実践コース	ペリネイタルケア. 42(4), 414-416, 2023.	解説	神戸市看護大学博士前期課程助産学実践コース
2	佐々木 翔子	明日の助産師を育てるために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦(第10回) ウィメンズヘルス演習	ペリネイタルケア. 42(2), 192-194, 2023.	解説	長崎大学 大学院修士課程リプロダクティブヘルス分野 助産師養成コース
3	石村 美由紀, 佐藤 蘭子, 道園 亜希 他,	大学院助産師教育における産育習俗探索(フィールドワーク)の実践報告	福岡県立大学看護学研究紀要. 20, 33-39, 2023.	解説	福岡県立大学大学院
4	野原 留美	明日の助産師を育てるために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦(第9回) 助産所での継続事例実習から地域での連携や、妊婦期からの切れ目ない支援を学ぶ。香川大学大学院医学系研究科看護学専攻助産学コース	ペリネイタルケア. 41(12), 1248-1249, 2022.	解説	香川大学大学院医学系研究科看護学専攻助産学コース
5	高田 昌代, 眞鍋 えみ子	明日の助産師を育てるために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦(第9回) 複数の教育機関との合同講義 神戸市看護大学大学院/同志社女子大学大学院	ペリネイタルケア. 41(9), 936-938, 2022.	解説	神戸市看護大学大学院/同志社女子大学大学院
6	宮川 幸代, 和泉 美枝, 眞鍋 えみ子	明日の助産師を育てるために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦(第8回) 分娩期シミュレーション教育 同志社女子大学大学院助産学実践分野	ペリネイタルケア. 41(8), 827-829, 2022.	解説	同志社女子大学大学院助産学実践分野
7	藤田 和佳子	助産教育の新たな挑戦 明日の助産師を育てるために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! (第10回) ハイレベルスク助産診断・ケア学 長崎大学大学院修士課程リプロダクティブヘルス分野助産師養成コース	ペリネイタルケア. 41(4), 379-381, 2022.	解説	長崎大学大学院修士課程リプロダクティブヘルス分野 助産師養成コース
8	松永 佳子	助産師の卒前・卒後教育の現状と目標 大学院での助産師教育の到達目標と現状	東京母性衛生学会誌. 33(1), 31-35, 2017.	解説	東邦大学大学院
9	江藤 宏美	法改正に伴う助産師教育と卒後教育を考える 助産師の大学院教育と臨床との連携のなかで期待する循環	母性衛生. 52(1), 18-23, 2011.	解説	聖路加国際大学大学院

育児は身体および心理的影響を受けやすく、安産祈願やお宮参りなど、産育習俗は心理的安寧を生み、女性と子どもおよび家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮させる原動力にもなりうる。産育習俗探索において、助産学生が妊娠・出産・子育てに関する人々の願いを知り、また身近に触れることで、妊産褥婦の深い理解につながると述べていた。

神戸市看護大学大学院と同志社女子大学大学院²⁹⁾では、両大学の合同講義について紹介していた。合同講義は、大学院の学生とディスカッションすることで、自分の持つ視点以外からの考えに触れ、新たな視点を得ていた。

聖路加国際大学大学院ウィメンズヘルス・助産学専攻³⁰⁾は、高度専門職業人の基礎を修める「上級実践コース」(助産師国家試験受験を希望する者のコース)と研究者の基礎を修める「修士論文コース」(既に助産師の資格、臨床経験を有する者のコース)のそれぞれ2つの履修モデルをもつ学修をもつ。「上級実践コース」では、理論期(I~III)と演習・実習期(I~IV)に大別し、両者を交互に組み合わせながら深めていくカリキュラムを採用している。助産学を学んだ大学院生の特性として、【旺盛な探究心】【助産という職務への専心】【調整力と焦点化の能力】【職業人としての円滑な人間関係スキル】が挙げられる。これらの特性は、基礎教育以上の大学院レベルの上級教育に特有のものであり、職業経験とは異なる形で培われる学習体験の重要性を示唆している。

VII. 結論

助産師教育における大学院教育では、継続事例実習、ウィメンズヘルス実習、分娩時シミュレーション教育、OSCEの実施、指定規則の規定を上回る分娩介助実習を行っていた。ハイリスク妊娠・分娩が増加している現状に対応するための方策として、NICU、MFICU実

習、遺伝カウンセリングに関する実習、縫合演習などが行われており、正常経過を逸脱した症例に対応する能力を育成するための実習が行われており、各大学院の教育が多様で特徴的であることが明らかとなった。文部科学省は、大学院で助産師教育をする際、修士課程修了要件の30~32単位に加えて、保健師助産師看護師法指定規則で定められた31単位を修得することを求めている^{25,30)}。大学院における助産師教育では、単なる技術や知識にとどまらない教育、すなわち、問題解決能力、論理的に分析する力や診断能力と実践力を身につけることを目指している。今後も時代に対応できる人材の育成に取り組んでいくことが求められている。

※本研究内容に関して開示すべき本研究における利益相反はない。

<文献>

- 1) 北岡萌：福井トシ子編 新版 助産師業務要覧 第3版 2018年度版，日本看護協会出版会，24-33, 192-200, 2017.
- 2) 保健師助産師看護師法 (2024.10.30 閲覧)：
<https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80078000&dataType=0&pageNo=1>
- 3) 日本助産師会：助産師のコア・コンピテンシー 2021 (2024.10.30 閲覧)
<<https://www.midwife.or.jp/midwife/competency.html>>
- 4) 日本看護協会：助産師教育の世界基準 (2024.10.30 閲覧)
<<https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icm/basic/standard/pdf/kj-03.pdf>. 2010>
- 5) 文部科学省高等教育局医学教育課 (2021)：看護系大学の現状と課題～助産師教育の動向を含めて～令和3年6月20日 (2024.10.30 閲覧)

- <<https://www.zenjomid.org/wp-content/uploads/2021/06/%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%E3%80%80%E9%AB%99%E6%A9%8B%E8%89%AF%E5%B9%B8%E6%A7%98%E8%AC%9B%E6%BC%94%E8%B3%87%E6%96%99.pdf>>
- 6) 厚生労働省 press Release：第110回保健師国家試験、第107回助産師国家試験及び第113回看護師国家試験の学校別合格者状況について
- 7) 文部科学大臣指定（認定）医療関係技術者養成学校一覧（令和5年5月1日現在）助産師学校（2024.10.30 閲覧）
<https://www.mext.go.jp/content/20230126-mxt_igaku-100001205-3.pdf>
- 8) 沼澤広子，森越美香，鈴木由美：大学院助産師教育における継続事例実習の学びの様相 2 段階のインタビューによるデータ分析，医学と生物学，163(1), 1-13,2023.
- 9) 神谷摂子，勝村友紀：大学院の助産師教育における育児期の継続家庭訪問支援教育プログラムの質的評価 教育プログラムを受けた学生の視点から，愛知県立大学看護学部紀要，28, 85-95, 2022.
- 10) 森兼眞理，五十嵐稔子，脇田満里子：助産学実習における継続事例実習の現状と課題—教育機関における実態調査を通して—，奈良看護紀要，11, 14-23, 2015.
- 11) 厚生労働省：看護師等養成所の運営に関する指導要領（抜粋）別表2 助産師教育の基本的考え方、留意点等（2024.10.30 閲覧）
<<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/07/dl/s0723-151.pdf>>
- 12) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（2024.10.30 閲覧）
<<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y.html>>
- 13) 藤原弘子，曾根清美：助産学生が受け持つ継続事例における周産期の学びの関連，インターナショナル Nursing Care Research，16(2), 21-29, 2017.
- 14) 岡山真理，森兼眞理，山名香奈美，他：修士課程における助産師教育での修了前客観的臨床能力試験（OSCE）を受験する学生の行動に影響を与える要因と効果的な修了前 OSCE の検討，奈良県立医科大学医学部看護学科紀要，11, 67-76, 2015.
- 15) 岡山真理，森兼眞理，山名香奈美，他：助産師教育における修士課程修了前に受験した客観的臨床能力試験（OSCE）の影響と助産師1年目に直面する課題，奈良県立医科大学看護研究ジャーナル，18, 52-60, 2022.
- 16) 公益財団法人 全国助産師教育協議会：大学院におけるモデル・コアカリキュラム 2018（2024.10.30 閲覧）
<https://www.zenjomid.org/wp-content/uploads/2021/02/2018_core.pdf>
- 17) 安河内静子，古田祐子，佐藤香代：大学院における助産師教育に対するニーズ調査，福岡県立大学看護学研究紀要，12, 53-62, 2015.
- 18) 柴田美佳，小林眞生，田村彩乃，他：大学院修士課程での助産師教育に対する看護学生の意見，北海道産科婦人科学会会誌，56(1), 11-20, 2012.
- 19) 三瓶まり，長島玲子，藤田小矢香，他：大学院修士課程における助産師教育の現状，島根県立大学出雲キャンパス紀要，15, 99-105, 2019.
- 20) 猿田了子：助産師の職業的アイデンティティの形成に関する研究 修士課程で助産師教育を受けた助産師における検討，日本赤十字秋田看護大学日本赤十字秋田短期大学紀要，24, 21-29, 2020.
- 21) 山田貴代，松岡恵，西川浩昭：大学院教育と学部教育の妊婦健康診査実習前後の助産実践能力に対する自己評価の比較，Journal of Wellness and Health Care，41(2), 139-150, 2018.

- 22) 江藤宏美, 高田昌代, 井上理絵, 他: 明日の助産師を育むために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦 (第12回) ウィメンズヘルス実習学生による主体的な実習 施設選択実習 神戸市看護大学博士前期課程助産学実践コース, ペリネイタルケア, 42(4), 414-416, 2023.
- 23) 佐々木規子: 明日の助産師を育むために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦 (第10回) ウィメンズヘルス演習, ペリネイタルケア, 42(2), 192-194, 2023.
- 24) 野原留美: 明日の助産師を育むために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦 (第8回) 助産所での継続事例実習から地域での連携や、妊娠期からの切れ目ない支援を学ぶ 香川大学大学院医学系研究科看護学専攻助産学コース, ペリネイタルケア, 41(12), 1248-1249, 2022.
- 25) 松永佳子: 助産師の卒前・卒後教育の現状と目標 大学院での助産師教育の到達目標と現状, 東京母性衛生学会誌, 33(1), 31-35, 2017.
- 26) 宮川幸代, 和泉美枝, 眞鍋えみ子: 明日の助産師を育むために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦 (第4回) 分娩期シミュレーション教育 同志社女子大学大学院助産学実践分野, ペリネイタルケア, 41(8), 827-829, 2022.
- 27) 藤田和佳子: 助産教育の新たな挑戦 明日の助産師を育むために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! (第1回) ハイリスク助産診断・ケア学 長崎大学大学院修士課程リプロダクティブヘルス分野助産師養成コース, ペリネイタルケア, 41(4), 379-381, 2022.
- 28) 石村美由紀, 佐藤繭子, 道園亜希, 他: 大学院助産師教育における産育習俗探索 (フィールドワー
- ク) の実践報告, 福岡県立大学看護学研究紀要, 20, 33-39, 2023.
- 29) 高田昌代, 眞鍋えみ子: 明日の助産師を育むために全国各地の個性豊かな教育現場を紹介します! 助産教育の新たな挑戦 (第5回) 複数の教育機関との合同講義 神戸市看護大学大学院/同志社女子大学大学院, ペリネイタルケア, 41(9), 936-938, 2022.
- 30) 江藤宏美: 法改正に伴う助産師教育と卒後教育を考える 助産師の大学院教育と臨床との連携のなかで期待する循環, 母性衛生, 52(1), 18-23, 2011.